

私は、オーストラリア研修で得た「農業」に関する学びを少しご紹介しようと思います。

まず、メルボルンでは学習の一環としてクイーンビクトリアマーケットを訪れました。ここは大きな屋根付きガレージのような場所で、野菜や果物や生活雑貨を販売する店舗が複数入っていました。販売されている農作物の種類は非常に多く、日本で見かけるもの以外にもドラゴンフルーツやアヒルの卵など少し珍しいものがありました。これらは大半がkg単位の量り売りで無造作に並べられており、全体としては卸売市場のような印象でした。私の感覚では業務用のスケールのもので一般家庭向けに販売されているような感じで、目新しさがありました。また、マーケットの近くにあった商店街の中には、生の魚や肉を販売している店舗がいくつもありました。ここでも、日本ではあまり見かけないような大きいサイズのソーセージや肉の塊が大量に積まれており、オーストラリアで多く生産されているラム肉もあらゆる店に置かれていました。実際にオーストラリアの消費者の立場になり、自分の眼で各所を見学してみることで、オーストラリアにおける農業の活発さや消費者との距離の近さを肌で感じる事ができたように思います。また、日本との比較を通してそれぞれの特徴や良さを考える良いきっかけとなりました。

次に、大規模施設栽培を行っている P'Petual を訪れました。ここはオーストラリアにおける施設栽培のパイオニアともいえる大規模な施設で、トマトやナス、キュウリなど様々な野菜の栽培管理が行われていました。この施設の特徴としては、温度や湿度や日射などの気候条件が全てコンピューターで制御されていることや、害虫の防除に益虫が利用されていることなどが挙げられます。見学した施設は巨大なガラス温室で、外部から害虫や細菌、動物などが侵入しないように扉が管理されていたり、入る人は白衣を着用して足裏を洗ったりしていました。また、環境への配慮という面で、水管理において Water recycle system というものが導入されていました。このシステムは、供給した水のうち植物が吸収しきれなかった分を回収して殺菌し、再び植物に与えるというものです。これにより栽培に必要な水量を大幅に削減させることができます。オーストラリアでは降水量が少なく、全体的に乾燥地域がおおいため、こういったシステムの構築により貴重な水資源を効率的に利用しているようです。また、これら以外にも、アデレードの各所で大規模なスプリンクラーでの灌漑といった日本ではあまり頻繁に見かけないものもありました。これらの見学を通して日本での植物工場のあり方についても学習意欲が増し、気候や文化の違いが農業に及ぼす影響などについても調べてみたいと思いました。今回のオーストラリア研修では、インターネットや文献だけによる勉強では得られない、実際に自分で見聞きする楽しさがあり、興味や学習意欲を高めてくれました。

JBS foods Australia

メルボルンに到着してから 2 日目は JBS foods Australia を訪れて、実際に工場内に入りオーギービーフの加工工程を見学しました。JBS につくと、初めに、講義室で資料を用いて JBS とオーギービーフについての説明を受けました。説明によると、訪れた日は 8 時間で牛を 950 頭収容したけれど、人手が足りず、工場内の施設を十分に使えていないのが現状であるそうです。他にも、オーストラリアは水が貴重な資源であり、水を多く必要とする豚の飼育は盛んではないなど、オーストラリアならではの畜産の話を知ることができました。説明を受けた後に工場内を案内していただきました。工場の中は手洗いの仕方から長靴の洗い方、従業員の服装まで徹底した衛生管理が行われていました。牛肉を加工している現場はとても寒かったです。そこで牛が屠畜ラインに引き込まれてから、枝肉になり、真空包装されるまでの流れを一つ一つ説明していただきました。工場の方々はとてもユーモラスがあり、わかりやすく説明していただきました。普段なら入れないようなところも案内してもらい、とても貴重な体験だったと思います。放血された後、片足をひっかけて吊り下げられた牛は機械で一気に皮を剥がれていきました。加工過程を見学するまでは皮のみでなく、肉を細かく解体していく作業も特別な機械を用いて行うと思っていましたが、実際は人の手による作業が多くて驚きました。その分、従業員の方々の枝肉をさばくスピードはとても速かったです。素早く、的確に肉をさばくためには長年の経験が必要であるとおっしゃっていました。従業員の方々は習熟度に応じてヘルメットで色分けされていました。工場内では屠畜されるからおおよそ 20~40 分で枝肉まで加工されるようです。屠畜から解体までの工程を見たこと自体が初めてだったので、学んだことがたくさんありましたが、同時に、衝撃的だったことや驚いたこともたくさんありました。この経験をこれからの大学での学習に活かしていきたいです。

Melbourne Museum

JBS を伺った午後にはメルボルンミュージアムを訪れました。メルボルンミュージアムは世界遺産に登録されているカールトン・ガーデンズと王立展示館のすぐ横にあり、公園内にはバンなどの水鳥がたくさんいました。入口からすぐにはクジラの骨格標本が展示してありました。その奥には恐竜の化石や恐竜以前の古生物の化石が展示してありました。中でも、下のトリケラトプスの写真は地球上で見つかった最も完全なトリケラトプスの化石の一つであり、とても印象に残っています。多くの恐竜の化石は間近で観察することができ、迫力満点でした。恐竜の化石のほかにも鉱物や昆虫、鳥類の剥製の展示がありました。鳥類の展示コーナーではオーストラリアの 10 セント硬貨に描かれているコトドリなどのオーストラリア固有種の剥製が多数展示してあり面白かったです。オーストラリアの固有種の数の多さを改めて感じることができました。



オーストラリア体験記（大学見学・現地の学生との交流編）

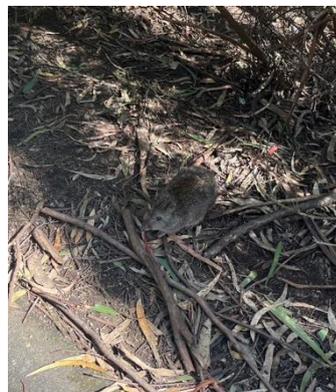
私がオーストラリア研修で一番緊張したことといっても過言ではないのは、アデレード大学への見学と現地の学生さんとの交流会です。アデレード大学内の見学では広大な土地にたくさんの施設があり海外の大学の凄さを感じました。Roseworthy キャンパスでは、獣医を目指している方々の施設を見学させていただいたのですが、牛・馬・ヒツジなどそれぞれの動物が大量に飼育されている所や、大型動物を診察することができる建物がありました。自分の人生であまり触れてこなかった所だったので、小学生に戻った気分で楽しくワクワクしながら見学することができました。Waite キャンパスの方ではワインの醸造所、キャンパス内の植物栽培施設、研究室など普段は見ることで見ることができない施設を見学できて勉強どころよりもまずは単純に感嘆の声をあげました。私は普段は農業に関する勉強をしているので Waite キャンパスの訪問は自分の知識でより理解でき、かつ新しい知識も吸収できるような見学となりました。どの施設でも、現地の先生方や生徒さん方がいろいろな質問に答えてくださり、新たな知識を得ることができました。また、アデレード大学の生徒の皆さんとの交流会も私にとっては大きな刺激になりました。交流会に集まってくださった方々の中には日本の方もいらっしゃったので、まだ拙い英語しかできない私たちを助けてくださいました。自分でコミュニケーションをとってみようとする、相手の学生さんが真剣に話を聞いてくださったり、会話を続けようとしてくださったりと、会話がはずんでとても嬉しかったです。自分たちの大学・学部ではどのようなことを行っているのか、訪問した時期がテスト期間であることや、どうしてこの大学に入ったのかなど色々な興味が沸き上がる話をたくさんしてくださいました。皆さんのお話がとても楽しかったです。一番興味深かったのが、現地の日本人の学生さんが、オーストラリアで1年ほど大学に行くために通う学校みたいなものに通って、この大学に来たのだという話です。私にとって海外の大学に行くということ自体が、とても大きな凄まじいことのように感じていたのですが、そこに入るために1年現地で勉強していたということを知って、今の私ではできないことだと自分を顧みました。この研修旅行では、現地の大学のほかにも様々な施設を見学し、またアデレードとメルボルンの街並みを見て回りました。それらを含めると自分が今いる環境との違いに新鮮味を感じ、自分も海外に行ってみたくて強く思いました。間違いなく、この経験は今後の人生において絶対に良い刺激となる貴重な経験だったと思います。現地の大学の先生や生徒さん達には感謝の気持ちでいっぱいです。

・オーストラリアの野生動物

今回の研修ではたくさんのオーストラリアの動物を見ることができました。鳥類では、日本では見ないものとして左からモモイロインコ、レインボーロリキート、キバタンを見ることができました。下の写真は実際に私が撮影したものです。モモイロインコやキバタンでは日本でいうウグイスやサギぐらいの頻度で、田舎の方や公園などで観察できました。真ん中のレインボーロリキートに関してはムクドリやカラスぐらいの頻度で都会でもよくいました。ここまでカラフルな鳥を日本ではなかなか見ないので心に残りました。



また、オーストラリアは有袋類天国でもあります。オーストラリアには有袋類が豊富で、今回の研修でも、下の写真のように有袋類を見ることができました。写真は左上からコアラ、フクロカンガルー、次ページにうつって、アカカンガルー、ワラビー、ハイイロカンガルーです。コアラはアデレードの郊外で野生の個体を観察することができました。珍しくて希少といったイメージのあったコアラの野生の個体を観察できるとは思ってもよらず、驚きました。残りの動物はアデレードにある野生動物園、Cleland Wildlife Park で撮影しました。Cleland Wildlife Park では広大な土地を利用して、多くの動物が放し飼いされていました。野生のようにのびのびと暮らす動物を見て、触れ合うことができました。次ページの真ん中の写真では、お腹のフクロから子が出ている個体も見ることができました。他にも Cleland Wildlife Park では黒鳥、タスマニアデビル、ディンゴといった日本からすると珍しい動物を見ることができました。





さらに印象的だったのは観光客向けのお土産屋さんでたくさんのオーストラリアの動物由来の商品が売られていたことです。下は研修中に撮影した、クロコダイルとカンガルーのジャーキー、カンガルーの陰囊でできた栓抜きです。オーストラリアの動物の中でも圧倒的知名度と人気を誇るカンガルーですが、実は害獣として駆除対象のようです。ただし、ただ駆除するだけではなくカンガルーは個体数を管理されながら利用されています。元々アボリジニの独特な食文化でカンガルー、ワニやエミューが食べられていました。それが近年、駆除したカンガルーの利用により再び多くの人に食べられ、観光客のお土産として人気でした。日本を含む多くの国は肉製品等についての持ち出しや持ち込みに規制をかけています。通常持ち出しには動物検疫所からの検査証明書が必要ですが、写真のジャーキーにはオーストラリア政府機関が発行する検査証明書が元々表記されており、お土産として外国人観光客が購入できるようになっていました。検査証明書がない食品は日本に持ち込めないの飛行機に乗る前に食べなければならず大変でした。外国人観光客から人気のある生き物が、現地では害獣と呼ばれており、駆除されたあとに、利用され特産品にもなっていることは、非常に興味深かったです。得難い経験ができました。



Australia 留学体験記

記事をご覧の皆さん、こんにちは、今回は2023年度、食生産科学副専攻の最も大きなイベントであるオーストラリア留学で私が体験したことについて、いくつかお話させていただきます。

まず留学の話をする前に、これを読んでいる現在副専攻を履修している皆さん、どうか副専攻をあきらめずに頑張ってください。私は留学に参加したメンバー中で先生を除いた生徒で唯一の男子でした。やはり同性のメンバーの有無は様々な面でかなり大きいです。しんどいところもちろんありますが、あきらめずに頑張ってください(笑)。

さて、本文です。私がお話するのはアデレードでの農業祭です。Royal Adelaide Showは今年で183年もの長い歴史を持つお祭りです。お祭りでは、子供が楽しめるアトラクションやキャラクターのグッズやお菓子などが入ったショーバッグと呼ばれる福袋を販売している子供向けのブースや、ウシや羊といった家畜の品評会、また、ワインやジャム、ビーフジャーキーなどが買えるブースもあり、お土産の購入にもおすすめです。

さて、私がこのアデレードのお祭りでぜひ見てほしいものが3つあります。

1つ目は会場にいる家畜たちです。羊・牛・豚など多種および多品種が会場では見られます。日本とオーストラリアで、飼育されている品種との違い、そして、「消費者」である我々と、いずれ「食品」となる家畜との間の距離感が違うことを肌で感じることができると思います。

2つ目は、丸太を斧で切り倒すスピードを競う薪割りの大会です。屈強な体躯をしたオーストラリアの男たちがすごい速さで丸太を指定の形状に切り倒していきます。力が強すぎると斧の刃が入りすぎて上手く抜けず、時間のロスになるなどパワーではなくスキルが極めて重要な競技なのが見ていてもわかり、とても見ごたえがありました。

3つ目は馬術競技です。オーストラリアはイギリスの植民地であったこともあり、馬術競技、ひいては馬と人との距離は日本の比ではないほど近く、一般的に日本では馬は産業動物としての側面が強いのに対し、オーストラリアでは愛玩動物としての側面もかなり強いのです。日本でも行われている障害飛越競技や、指定の演技を行う馬場馬術のほかに、日本ではほぼ見ることのできない戦車競技を見ることができます。一般的な乗馬では手綱、脚で馬にサインを送るのに対し、戦車ではサインを送る手段は手綱のみであり、難度は極めて高くなります。日本ではお目にかかることは難しいもののため見ておくことをお勧めします。